退官に寄せたつぶやき

田辺征夫さん

退官？、ん、退職？まだ公務員だから退官でいいのか、と迷わせるところが、今の置かれた状況を物語っている。勤務年数は35年と9ヶ月。若い頃のサッカーによるひんぱんな怪我以外、幸いにして大病を患うこともなくここまで来ることができた。意外と丈夫にできているのだなあ、と思ってしまう。こう言うと、怪我の時に長く入院し、まわりに大きな迷惑をかけたので、勝手なことを言うな、とのお叱りを被りそうだ。

話のネタも語り尽くせないほどあるが、どうせ中途半端になるからやめておく。私の場合は、幸か不幸か、奈文研一筋ではなかったので、その「思ひ出」も複雑である。研究所をわりと醒めてみているところもある。ひとつ間違いないことは、20年以上前は、ほんとにゆったりした職場だったし、今も、まだ他所と比べるとそういう雰囲気は残っている。しかし、外から見ると同質社会の閉塞性、危うさ、脆さも垣間見える。要注意。

ところで、研究所に入ったときに持っていたもので何が手元に残っているかと考えてみると、ほとんどない。勤めてから数年後に、大奮発して買ったモンブランの万年筆か、ニコンＦぐらいかな。ニコンＦは、今やカメラバックの中で静かに眠っている。もちろん家電製品など何度も買い換えている。人事異動のせいか、引っ越しが多く、家具はよく傷み、かなり変わってしまった。世の中では、1969年式の車などとんと見かけないが、こちとら立派な69年式だ、とずっと威張ってみたい気もする。

最近、キトラや高松塚のカビ議論で教えられた。最も単純で原始的な生き物が一番丈夫であるらしい。そこで、老後は、今以上に単純化して・・・、つまりさらにぼーっとすることによって長生きできないか、などという詰まらぬことを考えてしまう。本当のカビにならないように、と言われそうだ。

（埋蔵文化財センター　田辺 征夫）